9回目の福島紀行

ー「復興」とは何だろう？ー

2023年4月3日～4月5日

原発と気候危機を考える狛江の会　二階堂 まり

８年間続けたこの福島紀行も１０年目で一区切りにしようと思っていたが、コロナで行くことができず、すでに事故から１２年が経った。話題に上ることも少なくなり、忘れてしまっている人やもう終わったと思っている人もいるのだろう。毎年福島に行くと、「忘れないでくださいね」と言われたのを思い出す。今年も、いつもお話を伺っていたところを中心に、放射線量も測りながら西尾真人、須貝光典、石川巌と私・二階堂まりの４人で二泊三日の旅をしてきた。

◎いわき市民訴訟原告団長　伊東達也さん宅にて

マスコミで報道されている、まだ故郷に戻れない人数の3万人はまやかしの数で、2011年3月11日と比較すると、亡くなった人も含め約8万人はいるとのこと。

＊避難者の帰還状況

避難指示区域（避難12市町村）での震災発生時の2011年3月11日の住民登録状況は147,428人に対して、今年2023年1月12日現在の居住者数は64,776人である。つまり82,662人（56.0%）の住民が戻ってない。しかもこの居住者数には元々の住民だけではなく新規転入者も含まれているので、実際に戻っていない人はもっと多い。調べればわかるのに発表しているのは飯舘村だけで、他はしていない。

広い視点から原発事故とその被害を語る伊東さん

いわき市は避難者が一番多く、現在でも15,900人いるが、国の統計ではゼロになっている！？理由は「復興住宅」に住んでいるから！「終の棲家」にいるのだからもう「避難者」ではないのだそうだ。

帰還可能になっても戻る人は少なく、特に若者や子どもはほとんどいない。まず学校が休校・廃校。小・中・高の通学者数（2022年度）は2010年度の8,388人の10.1%である846人。しかもほとんどが村町外からスクールバス・スクールタクシー（2人くらいで乗ってくる）通学。高校はないから、中学を出たら外に行くだろう。このままでは未来が見えない。

＊福島の現状について

① 多方面にわたる精神的被害を広範囲の人々にもたらし続ける

（関礼子立教大教授の言葉を引用して）

強制避難指示区域の人々にとっては　「ふるさと剥奪」
避難指示区域外に住み、一時避難して戻ってきた人々にとっては　「故郷損傷」（きのこ山菜や川魚取れない）
戻らなかった人々にとっては　「ふるさと疎外」（のけ者にされる）

② 産業も元には戻らず
特に沿岸漁業の水揚げ高は元の 20％台。さらに汚染水海洋投棄・・・
特にこれの問題点は 1、県民合意がない　2、専門家から他の対策と抜本策が出されている　3、政府と東電は、関係者の理解なしにはいかなる処分もしないと文書で福島漁協と確認している

③ 30～40 年での廃炉終了は不可能。デブリ（溶けて固まった燃料）の取り出しは見通しすらない。ただ更地にするだけでも 100 年。元に戻すには数百年かかる。日本には廃炉法自体がなく、政府と東電は「更地に戻す」と言っているが法律自体がなく何をして更地というかもわからない。

＊いわき市民訴訟　ポイント

2023 年 3 月 10 日、仙台高裁は「経産大臣が適時適切に規制権限を行使していれば重大事故が起きなかった可能性はかなり高かった。8 年にわたり怠った国の責任も重大」とし原告の主張を取り入れながら「防ぐことができたはずと断定することまではできない」等々と、最後の 4 行ですべてをひっくり返して国の責任を認めないという不思議な判決。

つまるところ、その理由は、国の原発回帰政策と昨年 6 月 17 日の最高裁判決「事故発生の責任は国にない」に忖度したものとしか言いようがない。厳しいが最高裁でも闘っていく。

伊東さんご夫妻と一緒に

＊イノベーション・コースト構想について

F-REI（福島国際研究教育機構）が浪江町で開所し、被災地（浜通りの 15 自治体）に新たな産業基盤を作るため、研究施設を集める「福島イノベーション・コースト構想」の中心となる。岸田首相が来て「福島の、東北の復興の夢や希望になる」と！？2030 年度の完成時には、東京ドーム約 30 個分の広さに、150 室の短期滞在宿舎、50 の研究・実験室を備える予定。先端技術に重点を置くほど、地元住民への還元は難しくなる。「故郷」とは程遠い。他人がいなくなった空き地を自由に使って金儲け！！補助金は出るし、危険なことでもできる。事業運営費は 7 年間で 1 千億円を見積もる。県外の関連施設にも使えるので地元への還元は限定的。例えば 500 人の研究者が家族と来たとして、子どもたちは中学まではこの地にいたとしてもそれ以降は東京などに教育を受けに戻るだろう。
＊最後に伊東さんは、平和とは？との質問に、「住民が普通に生活できること」1.核兵器なくせ　2.原発なくせ　3.九条守れ　と語られた。

◎特定非営利活動法人「ザ・ピープル」

毎年訪問していた「ザ・ピープル」は、ちょうど東京でのイベントと重なり、代表の吉田恵美子さんたちが不在だったため、作業中の皆さまにご挨拶して寄付金を渡すだけで帰ってきました。残念！

◎市民測定室「たらちね」

事務局の皆さんと。
後列左から2人目　事務局長　木村亜衣さん

＊トリチウム水の測定では新しい機械の導入で2,500万円を投資（さらに小さい値まで測れる）、汚染水の海洋放出に備えてバックグランドデータを取る活動を進めている。特に第一原発前の沖合1.5ｋｍ地点4か所（右図A～D地点）で水面付近と水中15mのところで水を取り、測定。季節によって流れが変わるので、年4回測る。魚も測定用に釣る。沿岸は8か所。仙台近海でもサーファーの協力を得て5か所で測定する。セシウムを測るには20リットルの水が必要。複雑な海水濃縮設備を見学！

また、子供たちの甲状腺などの健康調査以外にも、心電図などの検査機器を購入して大人の健康調査も始めている。県は健康調査をやらなくなったが希望者はたくさんいる。最近は除染作業に女性や若者も従事している。被ばくのことを知って理解してやっているのだろうか？（心配だ。）検査は県外でもやっている。

＊どんどん機材も増やし、活動も広げてすごいねと言われるが、それが意味するのは、それだけ新たな問題が出てきているということ、何も解決していないということ。国は何も学んでいない。

双葉町の一部が避難解除されたが、同じ悩みの人（線量が高く、帰るべきか帰らざるべきか）がまた増えるんだなと。先日大熊町に行ったが怖いところがいっぱいあった。

トリチウム測定の複雑な前処理過程を説明する木村さん（左から2人目）

＊新たな試み「歴史探訪プロジェクト」

過去は未来をどうつくったのか？未来の子どもたちが私たちと同じ過ちを繰り返さないために、原発ができた土地の歴史を紐解き「何故こうなったのか」を突き止めていきたい。昔を知る人たちに「今」聞かねば。

＊お話を伺った事務局長の木村さんの言葉　「いつまで、福島だけは年間20mSvでOKなの？！」「帰還を決めるとき、学校が開くと聞いて、じゃあ、戻ろうか？に自分もなりましたね・・・」

◎宝鏡寺　伝言館・未来館・伝言の灯・非核の火

宝鏡寺本堂

室町時代から続く楢葉町「宝鏡寺」のご住職早川篤雄さん、2012年から毎年この時期に訪問して美しい花々が山の上から迎えてくれるこの場所で再会し、優しいながらも厳しいお話、お声を聞くのを楽しみにしていたが、昨年末に急に天に召された。第二原発の設置予定地とさ

れた楢葉町と富岡町の住民の疑問の声の先頭に立って設置許可取り消し裁判を闘い、その後も最後まで平和のために闘ってこられた早川さんに感謝でいっぱいです。合掌。

＊伝言館

早川さんと安斎育郎さん(1973 年から福島の原発に対する反対運動に一緒に取り組んできた) の二人で 2022 年に開館。福島原発事故・原爆と人間・ビキニ水爆被災事件などの展示を行っている。早川さんは原発シェルターも作っていらしたことにびっくり。冊子に「平和」とは「暴力のないこと」で、「暴力」とは「人々が自分の能力を 100%発揮するのを妨げる原因」と言っている。

伝言館1階。原発に関しての展示。地下は原爆被害に関する展示がされている。

＊未来館

各国で戦時中に文学者等の文化人がどのように変化し戦争協力させられていったかの歴史が展示されている。

＊非核の火

広島の原爆を生き抜いた男性が、叔父さんの家にくすぶっていた原爆の火を持ち帰り「恨みの火」として灯し続けていた。後日、「核兵器廃絶を祈る平和の灯」になり、それに長崎の原爆瓦から取った火が合わさって、上野東照宮境内にも送られた。30 年間上野東照宮に灯されてきた「広島・長崎の火(非核の火)」は、2021 年 3 月 11 日、宝鏡寺境内に移設されて、「ヒロシマ・ナガサキ・ビキニ・フクシマ伝言の灯」として受け継がれることになった。移すにあたっては、元福島県知事の佐藤栄佐久氏などが賛同を表明し、草の根からの核兵器廃絶の願いが凝縮する「灯」となっている。

＊原発悔恨・伝言の碑　(碑文)

電力企業と国家の傲岸に　立ち向かって 40 年 力及ばず
原発は本性を剥き出し　ふるさとの過去・現在・未来を奪った

人々に伝えたい。
感性を研ぎ澄まし　　知恵をふりしぼり　　力を結び合わせて
不条理に立ち向かう勇気を！
科学と命への限りない愛の力で！

2021 年 3 月 11 日　　早川篤雄　安斎育郎

伊東さんによれば、早川さんは、怒る人・負けない人・正論の人・感性の人だった。いいコンビ！早川さんご本人は、自分は百姓！一番向かないのが教師と坊主！と言っておられたと（早川さんは高校の国語教師を定年退職されている)。

◎夜の森桜並木

富岡町のシンボルである夜の森の桜並木の帰還困難区域が4月1日に解除され、全長2.4kmが全て通れるようになった。2013年に来たとき、やっと一部は入れるだけで線量が高く、ほとんど人気のないところに咲き始めた桜に胸が締め付けら

4/1 に解除された部分の桜並木

れたのを思い出す。新たに解除されたところに大きな児童公園が作られていたが、そこの線量は0.21μSv/hr（毎時0.21マイクロシーベルト）と海岸近く（0.06μSv/hr程度）に比べればはるかに高かった（狛江は現在0.06μSv/hr程度）ので少し驚いた。

◎富岡アーカイブミュージアム

「たらちね」の木村さんからぜひ見てくださいと紹介された町役場近くにあるミュージアム。町民の協力で、富岡町の成立ちと複合災害がもたらした地域の変化を伝える展示だ。3.11 の証言も大型スクリーンに動画で見られる。避難誘導にあたり津波に飲まれたパトカーが展示されている。被災前の富岡駅の模型も。

パトカーに二人乗車。沿岸部の住民を助けるために仏浜に向かい、津波に遭う。町民からの訴えで震災遺産として保全される。

◎「富岡 3.11 を語る会」

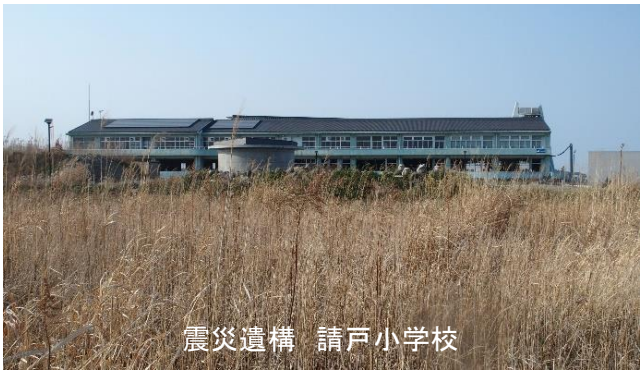
今回初めての訪問。宗像さんにお話を伺う。当時 6 年生。語り部・演劇・朗読劇をやり、現地でツアー＆講演（語り部）。各地出前も。今は知らない子どもたちもいるし語り継ぎたい。自分より上の人の話も聞いている。代表の青木さんが不在だったので若い彼と色々話したが、原発事故の話で、「防護壁が作られていてもダメだったかもしれないし・・・」と言っていたし、原発回帰の話で「自然エネルギーは高いし・・」という言葉を聞き、そうか、被災地でさえそう思ってしまうのかと少しショックだった。自然エネルギーの発電コストは急速に下がっているが、電気料金が値上がりしている現状を利用して原発の再稼働の宣伝に使われるのだろう。何よりも、原発は事故を起こす。起こせば核兵器と同様に人類を「崩壊」させる。パンフレットには「『崩壊』と『創世』の『狭間』に生きている私たちが、『狭間』を抜け出る時を必ず作れると信じて、私たちは語り続ける」という青木代表の言葉が書かれている。震災と原発事故の体験を地元でしかも住民が様々な手段で広く伝える活動を地道に続けていることに敬意を表したい。

◎６号線を富岡町から大熊町に入り、福島第一原発を右に見て、６号線から分かれて海に向かう道に入った。津波の後の何もないところにイノベーション工場が「ポツンと一軒工場」といった感じで建てられていた。津波被害を受けたこの広大な地域に普通の民家は建てられず、国が買い取って樹林公園にするという事だ。

◎請戸港近辺

請戸漁港から南に第１原発が見える。2019 年にはシンボルの櫓しか無かったが、建屋ができていた。偶然会った漁協の方に回復状況などの話を聞いたところ、30 艘まで回復（震災前は 98 艘）したが、漁獲量は震災前の 1/3 とのこと。

津波が 2 階まで達した請戸小学校は地震後、直ぐに山への避難を開始し、児童・教職員合わせて 95 人全員が無事だった。その校舎は震災遺構として公開している。



震災遺構 請戸小学校

請戸を含めたこの地域は原発の爆発で立ち入り禁止となり、津波による被災者の救助活動が打ち切られ、助かった命が奪われた人がいた。惨い！

◎浪江町昼曽根（１１４号線）4.37μSv/hr！！！狛江の約 100 倍！

114 号線は 2018 年から通過できるようになったが、昼曽根は復興拠点区域になっていない。そのため、次に述べる津島中心部のように今回の除染対象から除外されている。そのためか、2018 年の私たちの計測値 1.98μSv/hr から倍になっていた。

津島の清流にヤマメ発見！伊東さんの話しておられた「故郷損傷」・・(採捕禁止が解除されたとは聞いていない)

まだそのままになっている「津島町通学路」のかわいい標識が胸に刺さる。

津島、赤宇木は酪農が盛んだった。帰還困難区域が続き、復活の可能性はあるのだろうか？

◎浪江町役場津島支所

つしま活性化センターという表示も。ここは津島（帰還困難区域）の一部を特定復興再生拠点区域として 4 日前の 3 月 31 日に避難解除したところ。ちょうど、イオンの移動販売車のセレモニーが行われる前で、背広姿のイオン関係者がたくさん集まっていた。戻ってくる住民のためにイオンが生活用品などを販売するのだ。

浪江町役場津島支所。この後、背広服のイオン関係者が続々と集まってきた。解除後に初めての移動販売車による販売があるとのこと。どのくらい売れたのだろうか？

◎飯舘村

＊飯舘村特養ホーム：元の入所者は 100 名くらいだったが、2014 年にはじめて訪問したときは、60 名が残っていた。いっときは 30 名まで減ったが今は 45 名。平均年齢 91 歳くらい。介護士 28 名で三交代。戻ってきた人も避難地からの人もいるそうだ。

＊小中学校：約 100 名、30%くらい戻っているが、スクールタクシー・バスでほとんど村外から通っている。

飯舘村展望広場手前のバリケード前で。展望広場に徒歩で入る。2.150μSv/hr。2019 年の 2.380μSv/h からわずかに減少。

◎飯舘村「気まぐれ茶屋ちえこ（どぶろく茶屋）」

ここも今回初めて訪問。予約した山菜や凍み餅の昼食をいただいた。大変おいしく、量も多く、食べ過ぎないようにお赤飯や山菜をお持ち帰りパックに入れた。

千栄子さんは事故の 7 年前に、「日本一美しい村」に選ばれた飯舘村の「までいの村」観光事業の一つとして何かやりたいと、土地の美味しい食材を使った店（主に観光客向け）を立ち上げ、どぶろく作りの認可も受けてやっと軌道に乗りかけたところだった。避難中に夫と息子の死を乗り越え、2019 年に娘と戻って店を再開。もちろん採算は取れない。年金を使ってやっている。でも、人と出会ってお喋りすることはお金に換えられないよ！と明るく元気に楽しそうにたくさん話してくれた。内容は原発事故直後の恐ろしい話だったが・・・

・防護服の人が入ってきたけどなんだかわからなかったし何も喋らない。
・樋（とい）の下が５５あると言っていたが何の話かわからん

〔注：55μSv/hr という高線量。（今の狛江の約 1,000 倍！）一年目に我々がまだ通過できた飯舘村長泥地区の国道 399 号線を走っている時に、車内で線量計が振り切れて恐ろしい思いをしたことがある。その振り切れた線量計の限度が 10μSv/hr。その直後から現在まで長泥地区は通行止めが続いている〕

・外国人の二人組も来て畑を測って行ったが、何も言わずに帰って行った。
・放射能というのもわからない。乳がんの手術をしたので放射線治療というのは聞いたことがあったが。
・テレビも見れないし何も情報が来ないので津波のこともずっとあとに、避難所のテレビで見てびっくり。
・事故の 2 日後くらいに、買い物に行ったら、南相馬などのナンバーの車がたくさんいて、中で寝

ている人もいたのでびっくり。家に泊めてあげようかなとも思った。2 日くらいしたらみんないなくなった。変だなと思った。
・自主避難のときは自主だからしなくても大丈夫なんだなと思った。良い方に考えたいから。お上が良いって言ってるんだから。
・文科省の役人が来て、居ても大丈夫だよ、外から帰って中に入るときは服を脱いで着替えれば大丈夫だって。
・広島から来た学者は危ないといったがそれきりもう来なかった。何が危ないのかもわからなかった。あとは大丈夫だという人ばっかりきた。
・測りに来たりやってくる人たちに、普通にお茶やお菓子など食べ物出したけど誰も食べなかった。
・5 月に役場が避難するときにその近くに避難した。どこかのテレビ会社の人たちに、家が空くから使っていいよと言ったが使わなかった。
・そういえば、第一原発を作ったときに「何かあったら８０キロ逃げろ」と言われたのを思い出した。でも、何かあったらって言われても何があるのか見当もつかなかった。
・避難が遅かったから、もう空いてる避難所はほとんどなくて、線量が高いからと他の人が再移動したところとかしかなかった。
・どぶろくの資格取るのは大変でやっと取ったが居住地が変わるとダメと言われたが、変わりたくて変わったんじゃないし、役場と一緒のところだからと言って、なんとかなった。
・避難解除になり人々は戻っていいことになったけれど、12 年たって戻ってきても子どもたちは親の仕事を継ぐのは無理。一緒にやってきていれば戻ってきて継げるけど。
・スクールタクシーとかで冬も寒い朝早く起こされて通わされるのはかわいそう。親は、給食もタダだし、有名デザイナーの制服作ってもらえたりとか喜んでいるけど、学校は子どものためでしょ？！
　以前は農業もやっていたが、今はイノシシや猿が出て、男手なしでは柵も作れず、いまはやっていないそうだ。

◎大塚さん（飯坂町）

桃の花が美しすぎるくらいの大塚桃リンゴ園。
2014 年に果樹園にいらっしゃったところに声をかけてみたのが始まりで、毎年訪れて再会を楽しんでいる。今は収穫量は元に戻ったが価格がもどらない。価格調整で金は出るがぜんぜん。例えば山梨の桃と比べられたら安全な方を取られちゃうから安くなると。
ここも閉校や廃校があってスクールタクシーで通っている子もいる。

＜　最後に　＞

　4 年ぶりに来た福島。確かに全体的に放射線量は下がっているし、町村の中心は家も増え、生活が感じられるようになった。次々と「避難指示解除」されていると聞くと、遠くに住み情報もほと

んどない人たちは、よかったね、戻れるんだね！と思ってしまいがちなのではないだろうか。「復興」とは何だろうか？被災者にとっての「復興」とは元のように「生活」できる「暮らし」の「復興」なのではないだろうか。

「故郷剥奪」「故郷損傷」「故郷からの疎外」という三つの言葉、そして、そこを故郷とする人たちとはかけ離れた「イノベーション・コースト構想」・・構想の主要 6 分野には「ロボット・ドローン」「航空宇宙」も含まれ、パンフレットには「浪江町棚塩産業団地内に長距離飛行機試験のため滑走路を設けています。この施設を中核として、浜通り地域等への産業の集積を図ります。」とある。被災した方たちの想いは置いてきぼりにして、“復興”がどんどん進められていくという怒りと空しさを感じた旅だった。「無関心」は「賛成」に等しい。大きな力に引きずられることなく、少ない情報しかなくても、何とか事実を知る努力をし、目を離さず、できることをしていきたいと思う。「福島」は終わってなんかいない。「福島」を忘れないで話題に上らせていきたいと強く思う。

初めての福島訪問を経験して

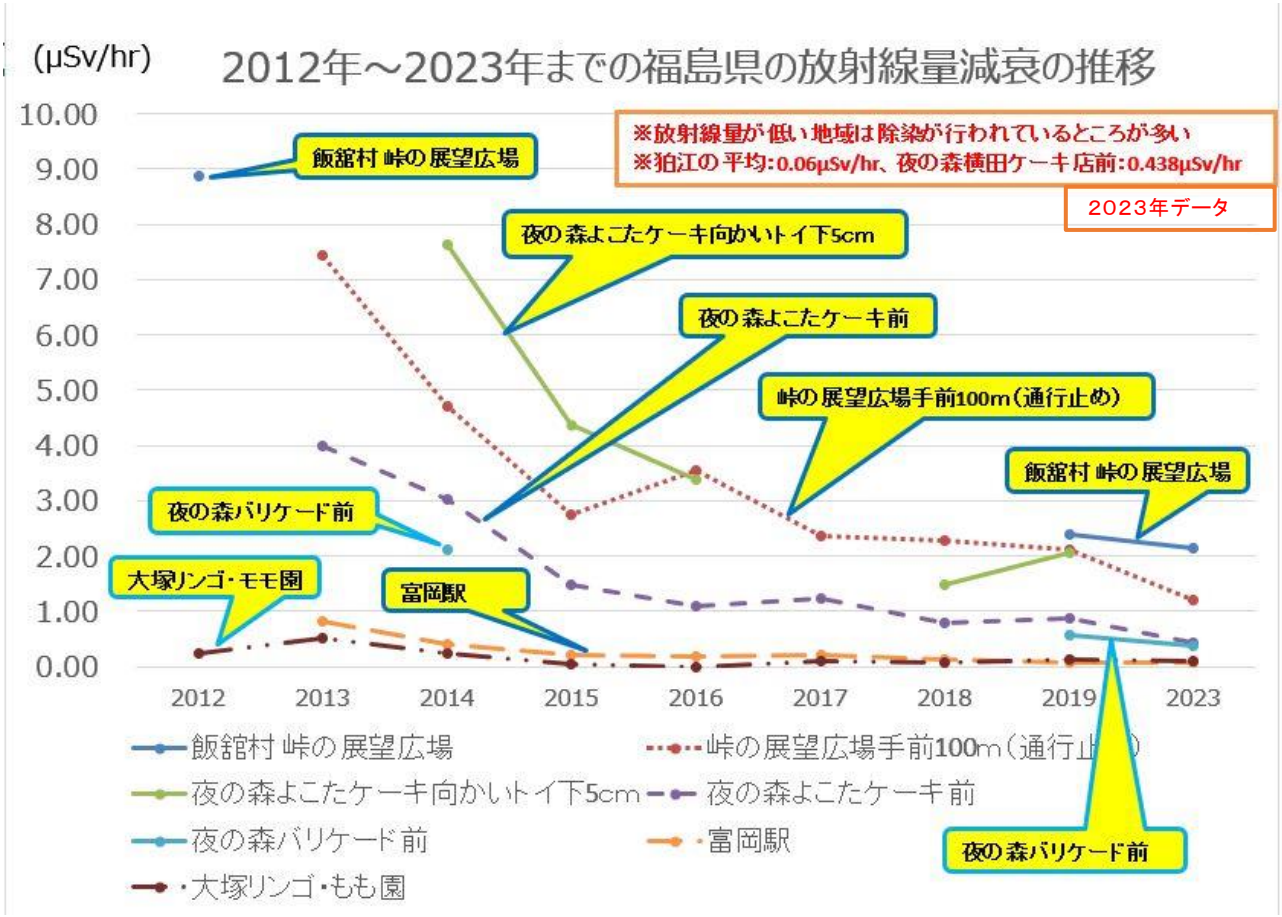
石川　巖

今回の福島行きが最初で最後になる立場、従って、これまでとの変化を感じられない立場から、私なりに感じたことを以下に記します。

一言で言うと、命と安定した生活・平和を守りたい当たり前の要求を掲げる人たちと、住民を“安全神話“に替わる新たな“バラ色の未来像”の欺瞞で、再び福島県民を駆り立て・支配しようとする権力側との対決が進行しつつある、このことが強く心に残った。

伊東さんたちは敗訴しても次なる最高裁の闘いに決然と臨み、国の責任を追及する。「たらちね」は、命と健康を守るために科学の力で真実を明らかにし、東電・国や他の組織のまやかしを暴く拠点を築いている。富岡町 3.11 を語る会は、模索と創造を積み重ねて、あの壊滅的被害を受けた富岡で被害を語り広げている。早川さんは、「原発事故はなぜおきたのか？」を歴史的に検証し、核戦争の非人道性、平和な世界の構築への熱い思いを、記録と構造物で遺した。また「気まぐれ茶屋ちえこ」さんは、放射能の恐怖とそれを村民に知らせず、隠し通した関係者の理不尽さ・非道を静かに告発した。“桃・リンゴの生産に強い愛着を持つ飯坂の大塚さんご夫妻は、福島産故に他産地より安価に取り引きされるという風評被害に会いながらも、それにめげず、明るく果樹剪定作業に励み、「フルーツ王国福島」の一端を担っている。並~~み~~大抵のことではない。

他方で、国はしゃにむに「復興」を急ぎ、年間被曝量年間 20 ミリシーベルトの差別的な基準を根拠にして、住民の帰還をせかしている。不安を抱えながら帰還する人も多い。復興住宅へ押し込んだら、もう避難者として扱わない。約束を反故にして汚染水を海に放出して、漁業者に再起不能のダメージを与えようとしている。そして、極め付きは、国家プロジェクトである「福島イノベーション・コースト構想」だ。ロボットだ、航空宇宙だ、と言った先進技術開発の拠点を作り、湯水のように国家予算をつぎ込むことが、どうして地元福島の復興と言えるのか。肝心の県民の望んでいることは置き去りにされた「構想」としか言いようがない。私は、ここには福島県民にたいする抜きがたい蔑視があるように思う。”今度はイノベーションで騙せるだろう”と。許し難い。



新舞子浜（いわき市）の夜明け

原発と気候危機を考える狛江の会
http://hakarukai.clean.to/
連絡先：西尾真人　toiawase2020@hakarukai.clean.to